

長崎華僑とランタンフェスティバル

Nagasaki Chinese and the Lantern Festival

章 潔

I. はじめに

ランタンフェスティバルは本来、長崎在住の華僑の人々が中国の旧正月（春節）を祝うための行事として始めたもので、「春節祭」として新地中華街を中心に行われていたが、1994年から長崎地域振興の起爆剤として規模が拡大され、現在では、冬観光の目玉となり、まちづくりに寄与する効果が注目されるようになっている。

本研究は中国人の長崎渡来に遡り、長崎華僑の誕生、華僑社会の変遷及び長崎新地中華街の成立の過程を振り返って記述し、さらに「春節祭」の創出から「ランタンフェスティバル」の開催までの経緯を追い、祭りの成功の要因を探ることを目的とするものである。

II. 長崎華僑

長崎華僑に繋がる初期の中国人の来日は、1571年長崎開港の時と言われる¹。その後、長崎を拠点とする日中両国の貿易は盛んに行われ、次第に在留中国人の人口が増加した。1614年に江戸幕府が禁教令を公布し、キリシタン弾圧を始めたため、長崎の在留中国人は相次いで興福寺、福濟寺、崇福寺、聖福寺²などの仏教寺院を建立し、キリスト教を信仰していないことを示し、貿易関係の安全保持に努めた。こうして建立された「唐四箇寺」は「四福寺」とも呼ばれ、これによって長崎の中国人は明確に三江、福建、広東の三つの「幫」に区分され、この「幫」が後の華僑の組織団体の基礎となった。唐四箇寺は、地縁、血縁、業縁を核として、長崎華僑を出身・地域別に結びつけただけでなく、建立以来、海上安全を守る神「媽祖」をはじめ、財神「関帝」などの諸神を祀り、宗教的な相互扶助団体として、祭祀・親睦・集団統合の機能を果たしてきた。

17世紀の半ばから後半にかけて、日本と中国の貿易はピークを迎えたが、幕府の貿易統制は更に強まっていたので、長崎港外では密貿易の増加が問題となっていた。禁教と風紀の問題もあり、幕府は中国人を一定の場所に閉じ込めようと考え、1688年十善寺郷にある幕府御薬園の土地で唐人屋敷の建設に着手し、1689年に完成させた。鎖国期における唯一の海外貿易港であった長崎において、唐人屋敷は「出島」と共に海外交流の窓口として大きな役割を果たし、幕府の規制によって成立した1種の中華街であったということが出来る。日中貿易の拠点となった唐人屋敷は1784年の大火でほとんど焼失し、その後、中国人自前の建築が許されるようになったため、唐人屋敷の構造も当初とは大きく変わってしまい、機能や性質の面でも変容していったのである。

1850年、中国では清王朝打倒をかかげた「太平天国の乱」が起り、反乱軍は南京を制圧して都とし、全国が騒乱状態に陥った。来崎の中国船は通常、50日間ほど滞在して帰帆するが、中国での

戦乱は治まる様子がなかったため、船員たちは足留めを食うこととなった。3隻の中国船乗員を代表して、中国人船主の中から選ばれた唐人屋敷総代の鈕春杉³は長崎奉行所に、本国の戦乱が治まるまで唐人屋敷に居留させてほしいと嘆願し、受け入れられた。そのため、中国船の船員と彼らを頼ってやってきた家族らを合わせて約1,000人が唐人屋敷で生活することになり、この人たちの中から居留が長引いて定住する者も現われ、日本における近代華僑（長崎華僑）が誕生したのである。しかし、当時は中国と日本の間にはまだ条約がなかったので、唐人屋敷にいた中国人たちは非条約国民として扱われ、さまざまな制約があった。そのため、一部の中国人は、1860年に大浦外国人居留地が完成するとすぐに唐人屋敷から抜け出して、居留地に移ったのである。

明治維新後、神戸、横浜などが開港されるとともに、長崎は貿易港としての特権を失い、次第に廃墟化した唐人屋敷の必要性もなくなり、1870年の火事で焼失した。また、長崎貿易の主導権は、通商条約を結んだイギリスやアメリカの商人たちに奪われたため、長崎華僑の一部は本国に引き揚げたり、各開港地に移ったりした。長崎に残った華僑たちは、外国商社の付属者という合法的地位を利用して貿易を続け、西欧の汽船を利用して上海、アモイ、台湾や東南アジアなどとの貿易に奔走した。当時においては、三江、福建、広東の三つの「幫」を活動の基盤としての華僑の地縁、血縁のネットワークが大きな役割を果たしたのである。1871年の「日清修好条規」締結と1878年の長崎清国領事館の開設の影響を受け、中国貿易は再び活気を取り戻し、居留地に「泰昌号」、「盛隆号」、「豊記号」、「万昌和」などの商社が軒を連ねた。1884年、長崎華僑は「長崎中華総商会」を設立し、梅香崎町にその事務所を置き、日本の各都市に設置された総商会との連絡などにあたっていた。長崎華僑が活発な貿易活動を展開する一方、中国国内は西欧列強の相次ぐ侵略により半植民地となり、多くの中国人が日本に渡った。明治政府は中国人の更なる大量流入を防ぐために、1899年に「内地雑居令」を実行し、単純労働者の内地進出及び新規入国を原則として禁止した。この政策によって、日本人との競争が生じたため、在日中国人たちの職業は日本人に対する優位が保たれている「洋服仕立・料理・理髪」いわゆる「三刀業」へと特化していった。長崎華僑の中でも、多くの人が「三刀業」へと転業するようになった。例えば、中華料理店「四海楼」の創始者陳平順はその中の一人であった。リヤカーに反物を積み、行商をしてきた陳は1899年、広馬場に中華料理店と旅館を兼ねた「四海楼」を創業した。この「四海楼」で生まれた「支那饅頭」が明治末期には、その名も「ちゃんぽん」と変わり、長崎で最も親しまれている大衆料理へと発展したのである。

20世紀初頭から、長崎華僑は時中小学校を孔子廟の中で設立し、子弟の民族教育を始めた。この小学校は九州唯一の華僑学校として、1905年から1988年までの83年間にわたり、長崎華僑子弟を中心に九州各地に散在した中国人子弟を受け入れ、教育にあたった。1907年、長崎における中国商業の発展を主な目的として、貿易、雑業、料理業者によって「長崎中華総務会」が設立された。1911年、中国では辛亥革命が起り、日中の社会情勢に変化をもたらすと共に、長崎の華僑社会にも大きな影響を与えた。長崎に残った華僑たちは、中国革命政府の力に頼ることができず、自治組織の強化を図るため、様々な華僑団体を設立して、日本に根を下ろし、波乱の時代を乗り越えようとしたのである。しかし、第二次世界大戦後、日本社会・経済の復興の中、これらの華僑社会の団体・組織の構成・性質及び華僑たちの伝統的な生活様式などが大きな変容を迎えた。まず、華僑たちの世代交代につれ、従来堅固であった同郷グループによる組織基盤が大きく揺らいで、職業原理に基づく同業団体が大幅に減少し、経済的な目的で組織された総会や公所・会館などが形骸化した。同郷グループの結びつきを弱体化させた要因として以下の四つを挙げることができる。

- (1) 新地中華街において従来のような「三刀業」のうち、料理業を除いて、理髪や洋裁に従事する人が少なくなり、同業による結びつきが失われた。同時に、華僑の若者は日本企業への就職が増加し、就業の多様化が進んでいる。
- (2) 日本語の常用によって、同郷グループの形成要因となっていた中国語「方言」が廃れざるを得なかった。
- (3) 同郷グループを越えて華僑社会全体を対象とする組織が結成された。
- (4) 華僑の生活が次第に落ち着き、日常生活において日本社会に同化するという道を歩むにつれ、同郷グループに頼る相互扶助の必要性が薄くなった。

また、戦後の華僑の3、4世たちの間では中国民族文化の影響の希薄化、言語・生活様式の日本化が急速に進んでいる。中日友好、国際交流の時代といった時代的背景に恵まれている彼らを取り巻く社会環境が改善され、一般的な生活水準が日本社会の平均水準に達し、日本社会・文化への適応がすんなりできるようになった。かくして、長崎華僑は長い年月を経て、長崎とともに歩み続けてきて、新しい時代を切り開く上でも大きな役割が期待されている。

Ⅲ. 長崎新地中華街

江戸時代、中国各地から長崎に運ばれてきた荷物は、樺島町あたりの土蔵に保管されていた。1698年の大火で、中国船20隻分の貨物が収められていた土蔵33棟がすべて焼失してしまい、その損害は大きかった。このような火事が二度と起こらないように、また、地つづきによる延焼被害を避けるため、1702年に唐人屋敷前の海を約3,500坪埋め立てて中国船専用の倉庫区域として造成した。埋立地は、造成によって新しくできた場所ということから「新地蔵所」と呼ばれるようになり、これが現在の長崎新地中華街の前身となった。

幕末になって、日本が開国すると共に、欧米諸国の進出により、華僑の独占的な貿易が次第に難しくなった。そのため、「新地蔵所」は廃止されて、店舗や住居に改造され、1868年に、広馬場とともに外国人居留地に編入されると共に、多くの華僑が廃墟化された唐人屋敷からそこへ移動した。また、大浦に集中していた華僑商社の一部も新地に移動を始め、それに伴い広東幫は大浦、福建幫と三江幫は新地と広馬場にと住み分けられるようになった。この状況がしばらく続き、その後、新地・広馬場は中国人が徐々に集中するようになると、中国人街として特殊な地域を構成した。1897年頃の長崎華僑の居住地区と業種を記録した資料「各国人員併戸数調表」からは、当時の華僑社会は業種が多岐にわたっており、新地に貿易商や雑貨商などが多く、飲食店、理髪店、旅館などのサービス業は広馬場、大浦に集中していたことが分かる。

1899年「内地雑居令」の公布により、貿易商以外の雑業者の内地進出が許可され、福建幫の一部（福建省南部出身者）、広東幫の商人が新たな貿易の転機を狙い、横浜、神戸へ居住を始めた。一方、福建省の福州や福清の出身者の渡来が増加し、新地では洋裁、料理、理髪などの店舗も多くなった。日清戦争の勃発により、経済的に大きな打撃を受けた三江幫、広東幫の貿易商の多くは中国に帰国したが、その一方で、主に料理業、行商業などに従事していた福建省北部の出身者は、中国に戻っても生活できないため、日本に残るしかなかった。こうして、中華料理店や雑貨店などが主となった新地の風景は一変し、その頃から、華僑の住居も次第に日本風になっていった。終戦後ももなく、1947年の新地大火災のため、中国風の建物はほとんどなくなり、新地に住む日本人も増加していき、次第に華僑より日本人が多く住むようになった。このような状況の下で、1951年、新地町の日本人

と華僑は一緒になり、「新地町親交会」を結成した。1960年から華僑人口の減少、他地域への拡散により、新地町に住む華僑世帯の数は約50世帯になった。

以上述べたように、華僑よりも日本人のほうが多く、中国風の建物も少ないことから、長崎華僑の歴史に関する文献では、居留地の一つとしての「新地」という言い方がよく見られ、「新地中華街」という言葉はほとんど使われていなかった。「長崎新地中華街」と呼ばれるようになったのは、1984年「新地中華街商店街振興組合」の設立に伴って、新地の中心となる十字街の東西南北に中華門が完成してからである。

1980年頃まで、新地には中華街らしい装飾や雰囲気ほとんどなく、単に中華料理店や雑貨店が立ち並ぶだけであった。「組合」の初代理事長林照雄によると、「1983年に新地の十字路の真ん中にある観光客に中華街がどこにあるかと聞かれたことがある」ということである（2002年2月20日の『長崎新聞甲比丹21会報』による）。また、当時は華僑総会や福建同郷会、そして中華料理同業組合などはあったが、新地中華街だけの独自の組織はなかった。そこで、新地を華僑活動の中心である「中華街」として活性化するために、組織が必要となってきた。これが1984年4月に「新地中華街商店街振興組合」（以下「組合」）が結成された主な要因である。また、外在的な契機としては、日中国交回復以後に長崎でも盛んになった両国友好の動きが挙げられる。以下にその重要なものを整理しておく。

- 1972年 日中国交正常化実現、第1回長崎県友好訪中使節団を派遣
- 1973年 中日友好協会訪日代表団来県、長崎県日中親善協議会設立
- 1974年 元唐人屋敷内の土神堂、観音堂、天后堂を市史跡に指定
- 1978年 日中平和友好条約締結
- 1979年 長崎～上海間に定期航空路開設
- 1982年 長崎県・福建省友好県省締結調印
- 1983年 孔子廟に中国歴代博物館開館
- 1985年 在長崎中国総領事館開設

このような流れの中で、中国と長い交流の歴史をもつ長崎に、さらに中国的な雰囲気をもった中華街を建設すべきであるとの声が高まってきた。そして、新地の中心地で商売をしている若手の店主を中心に、市や周辺地域からの要望も加わって、新たな中華街として作り直していこうという提言が持ち上がったのである。「組合」ができてから、その最初の活動として中華街のシンボルとなる中華門を造ることが挙げられた。「組合」の代表たちは中国福州市から職人を招いて、新地中華街の東西南北の入口の4ヶ所に中華門を造り、それと同時に、長崎市からの協力を得て、中華街の街路の石畳化をも実行した。1986年の春、これらの工事が完了し、4月1日に落成式が行われた。中華門ができた後、中華街の店舗も中国色を強調するために改造され、チャイナタウンとしての景観が形成されたのである。

IV. 「春節祭」から「ランタンフェスティバル」へ

中華門の竣工をきっかけに、「組合」が中国らしい行事で「春節」を祝うことを思いついた。春節とは旧暦の正月である。数千年以来、中国の暦法は多くの改革を経てきたが、一貫して旧暦を用いていた。1911年の辛亥革命以後、初めて西暦を採用するようになった。こうして、西暦と旧暦の二

つの「年」を区別するために、また旧暦の新年がちょうど「立春」の前後にあたり、旧暦の新年を「春節」と呼ぶようになった。春節は中国で最も重要とされる年中行事であり、新暦の正月に比べ盛大に祝賀される。江戸時代に、唐人屋敷の中で中国人たちは「春節」や「元宵節⁴」を祝い、盛大な行事を催した。また、「春節」の際に祖先と財神を祀ることは、第二次世界大戦前までの長崎では華僑によって大に行われていた。「春節」になると、すべての店舗が3日間ほど休業し、華僑たちは祖先や財神を祀ったり、家族団らんでご馳走を食べたり、互いに新年の挨拶を交わしたりした。

しかし、戦後、華僑居住地の拡散、華僑人口の減少、職業の変遷、そして世代交替による日本社会への同化の進行によって、次第に日本人と同様に新暦の正月が重要な位置を占めるようになり、華僑の家庭では春節を祝うことがほとんど行われなくなった。従って、中国料理店、雑貨店を営んでいるとしても、実際には中国的な伝統文化は日常生活の中にほとんど残されていなかったのである。そのような状況の中で、新地中華街が新しく整備されたのを契機に、中華街の活性化を図る意図も含めて、失われていた中国の「春節」と「元宵節」の習慣を復活させ、それをテーマにして新しい祭りを作ろうという気運が盛り上がった。「組合」誕生当初のメンバーの半数以上は華僑の2、3世で、親の世代から日本で生まれ育ち、本場中国の春節を知らなかったため、中国やシンガポールなどに視察と、ランタンなど祭具の仕入れに行った。1987年の春節で初めて香港や福建省に注文した約400個のビニールの燈籠を中華街の十字路に飾った。そして、中華街の中心地で僑友会による獅子舞を披露し、子供のランタンパレードを行ったほか、記念テレフォンカードを作り、長崎名物のちゃんぽんを100円で売り出し、中華粥を無料で提供した。かくして、ランタンフェスティバルの前身である新地中華街の春節祭（別称、燈籠祭）が誕生したのである。

1990年、長崎県・長崎市・長崎商工会議所の主催により、「旅の博覧会」が開催され、新地中華街は「異国中国のゾーン」として選定された。「旅博」期間中、「組合」のメンバーを中心に、当時大ヒットした映画「ラストエンペラー」をアレンジし、清の時代の皇帝皇后の結婚式を再現した「中華大婚礼」というイベントが催された。3組の新郎新婦を全国に公募し、婚礼の御輿、衣裳とその他の道具を中国福建省福州市で調達したほか、商工会議所青年部、長崎青年会議所、長崎青年協会などの団体に協力要請して集めた100名を越すパレードの参加者によって、「中華大婚礼」は成功を収めた。「組合」のメンバーはこのイベントを通して、経験を積み、後のランタンフェスティバルの開催に繋がったのである。1991年、「組合」のメンバーは長崎市に、中国風の公園にリニューアルされた新地中華街に隣接する湊公園を「春節祭」のイベント会場として使用したいと申し出た。この申請は許可され、湊公園に中国風の祭壇が設けられることとなったのである。その後、僑友会の獅子舞の他に、幼稚園の子供たちによる龍踊り、ダンスも登場し、「春節祭」の規模はますます拡大していった。「春節祭」の運営については、当然ながら「組合」がその主催と実行を担っており、毎年⁵12月頃から準備が始められたが、その期間は最初は旧正月を中心とした3日間だけであった。

1993年春、「春節祭」に転機が訪れた。長崎「旅」博覧会の反動や雲仙・普賢岳噴火災害の影響、そしてハウステンボスの開業などによる観光客数の減少傾向を止めるため、長崎市では様々な観光施策を練っていた。その中の一つとして、「夜の街を光で演出して冬の観光客を増やせないか」という声が市役所内で上がり、急遽1,000万円の予算が割当てられたのである。それと関連して、長崎市内23ヶ所の観光施設のライトアップやグラバー園の夜間開園を実施し、幻想的な長崎の夜を演出する「長崎夜景ウィーク推進事業」も展開され始めた。ランタンフェスティバルの企画が生まれたのは、このような新しい長崎の魅力を見つけ出し、滞在型観光の推進を図ろうとしていた時であった。当時の長崎市観光協会の誘致宣伝部長であった出口静夫が会議で「中華街で何かやってるぞ」と発言

したことがきっかけになり、中華街の「春節祭」に白羽の矢が立った。しかし、母国の伝統や風習が観光客目当てのイベントになることに違和感があったため、「組合」の人たちは最初は気が乗らなかった。その後、市役所の担当職員が何度も中華街に足を運び、その熱意にほだされた「組合」は市と協力して春節祭を拡大し、更なる夜型観光の起爆剤にしようとする決意を下したのである。こうして、1994年から長崎市の他に、長崎商工会議所、長崎市観光協会（現長崎国際観光コンベンション協会）、その他の各種市民団体も協賛するかたちで、官民一体の「長崎ランタンフェスティバル実行委員会」が組織され、「長崎に息づく異国、CHINA 再発見」をコンセプトに、「長崎ランタンフェスティバル」と銘打って新たなスタートを切った。以来、観光オフシーズンである冬場の長崎観光の目玉として逐次規模が拡大され、2014年までに計21回開催された。

ランタンフェスティバルの初日には、「春節礼祭」と「点灯式」が行われる。実行委員長による開会挨拶の後に、カウントダウンによってランタンが点灯されると、花火や爆竹が一斉に鳴らされ、獅子舞なども披露される。初年度からしばらくは10～15日間であったランタンの装飾期間は年ごとに増やされ、同時に装飾範囲も広げられてきた。規模の拡大により、会場の増設が必要となり、唐人屋敷跡（2000年）、中央公園（2003年）、中島川公園（2007年）が加えられ、2001年から土日の交通規制も実施され始めたのである。そして、初めの頃の「春節礼祭」、「点灯式」及びパレードなどのイベントの日程が主に春節前後の金、土、日と決められたが、1998年からは春節（旧正月の1月1日）から元宵節（旧正月の1月15日）までの15日間になった。1994年7月にランタンフェスティバル実行委員会が成立したことにより、イベント行事も1995年から本格的に拡大されていったのである。まず、子供たちによるランタンパレードが総勢130名参加の大規模な皇帝パレードに変えられ、そのメンバーは長崎市民から公募された。以後、皇帝パレードは媽祖行列、中国獅子舞、クーニヤンダンス、中国雑技とともに祭りのメインイベントとして定着するようになり、人気を博していった。そして、長崎市民の参加意識を高めるための「手作りランタンコンテスト」（1995年）、長崎の伝統ある龍踊りをテーマにした「ドラゴンダンス」（1997年）、福建会館における中国民族音楽の鑑賞会（2000年）、中国をイメージした曲に合わせたパフォーマンスを行う「ダンスフェスタ」（2000年）、ダンスや音楽・演劇などのジャンルで誰でも参加できる「市民ステージ」（2005年）、ガイドがランタンに彩られた長崎を案内する「ランタンさるく」（2006年）、崇福寺での「元宵団子」の無料振舞い、浜町会場で行われる「月下老人縁結び祈願」（2007年）などが次々とランタンフェスティバルの中に取り入れられ、多くの観光客を引きつけてきたのである。

V. 祭りの成功の要因

ランタンフェスティバルは誕生以来、夜型観光の開発・促進に寄与し、長崎観光の起爆剤として逐次規模が拡大され、すでに観光オフシーズンである冬場の目玉になっていると言える。特にその開催期間が非常に長いことに加え、多彩なイベント内容の魅力も相俟って、近年、集客数がほぼ毎年90万人台を超えるようになり、長崎市全体の観光客集客数を押し上げた（図1）。また、新地中華街および他の商店街の売り上げだけではなく、長崎市内の宿泊施設の稼働率や、グラバー園、孔子廟、長崎ロープウェイなどの入場者・利用者数も大幅に増えた。2014年のランタンフェスティバルについて、長崎市は15日間の期間中、人出が約87万人（過去5番目）だったと発表した。前年比約14万人の減少だったが、市内主要宿泊施設の平日の平均稼働率は81.4%（前年比3.7ポイント増）と過去最高を更新した。集客減少の理由としては、2013年に比べ休日が少ないことや、積雪による高速道路の通行止めや飛行機の欠航などが影響したことなどが挙げられた。一方、長崎経済研究所

の調査によると、2013年のランタンフェスティバルの観光客の飲食費・宿泊費や土産物代などの直接的な消費額と、間接的な波及効果が合わせた経済効果は、全体で93億円に上り、祭りが誕生して以来、長崎市の地域振興に経済的な面で大きな貢献をしたことが明らかになった（2014年の経済効果のデータはまだ発表されていない、2014年3月現在）。

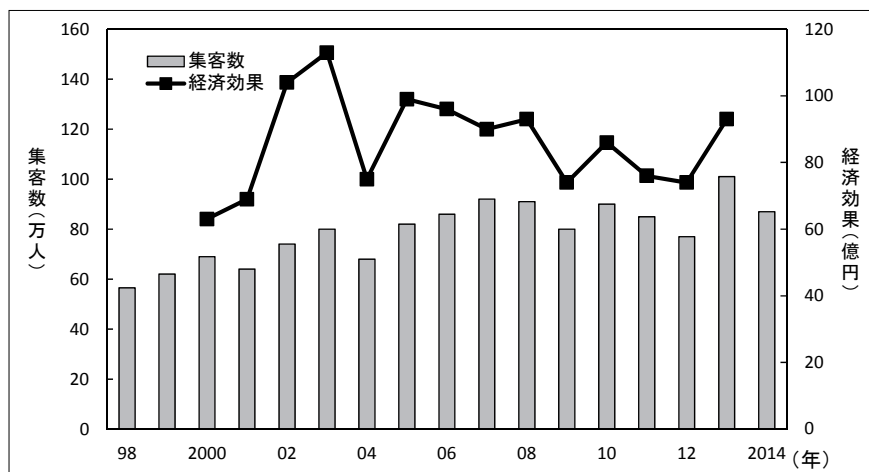


図1 ランタンフェスティバルの集客数と経済効果

資料：長崎ランタンフェスティバル実行委員会資料により章作成

(1994～1999年は、長崎経済研究所による経済効果調査が実施されなかったため、統計数値はない。)

こうしたランタンフェスティバルの成功の要因は以下の四つにまとめることができる。

第一は、綺麗なランタンや多彩なイベントを通して、参加者の五感に刺激を与え、魅了していることである。ランタンフェスティバル期間中、長崎の街に飾られた1万5千個を超えるランタンは効果的に配置され、寒い中で赤色の光を放ち、暖かい雰囲気醸し出している。また、目で楽しめるのはランタンだけではなく、多彩なイベント・ショーが期間中毎日演出されており、中国雑技、龍踊りや中国獅子舞などが高い人気を集めた。さらに、興福寺会場などで行われた中国民族音楽演奏は耳を楽しませ、新地中華街や会場の屋台などで販売されているちゃんぽん、皿うどん、角煮饅頭、ヨリヨリなどは観客の胃袋を満たしている。こうして、ランタンフェスティバルは、見る人たちの五感を癒し、年々かたちを変え、成長してきている。

第二は、ランタンフェスティバルの「異国情緒」の演出が洗練されており、エキゾチックで不思議な空間が仕掛けられていることである。期間中、赤いランタンが飾られた長崎市街地は非日常的な祝祭空間となり、龍や鳳凰、獅子など、幻想的な中国独特のランタン、龍踊り、獅子舞、中国雑技、胡弓の演奏、中華菓子や雑貨・土産品をはじめとしての象徴群が祝祭空間を構成している。観客は、それらの象徴群を体験することによって、自分のいる場所が非日常的時空間であることを実感できるのである。

第三は、祭りや大型イベントの少ない冬場に長期間にわたって開催されることである。春節の期日は毎年変わるが、開催期間は2週間にも及ぶので、懸念される集客の問題がこれによって解決できるようになった。

第四は、新地中華街がほかの商店街をも巻き込み、長崎市、商工会、地元企業とも一体となって

企画を充実させ、さらには、後援の長崎県や市民ボランティアも幅広くランタンフェスティバルを支えたことである。ランタンフェスティバルは中国との交流の歴史と中華街というロケーションをうまく生かして、広く鑑賞に堪えうる盛大なイベントとして作り上げられた。長崎くんちにひけをとらない風格を備え、情緒と艶やかさを兼ね備えているという評判さえ生まれており、日本全国での知名度も上昇している。

現在、ランタンフェスティバルは長崎の冬場の観光客を維持するために必要な事業となっており、若し、これを実施しない場合には、この時期の観光客は激減すると考えられる。そのため、長崎市側は今後の発展を目指すための更なる集客対策を主に二つ提言している。①九州方面のエージェントを通じたバスツアー客いわゆる日帰り客が増えつつあるが、夜型イベントの特色を活かして宿泊客の増加を図るため、関東・関西など本州への効果的な広報活動を展開すること、②会場装飾の充実や会場の拡大には多額の経費を要するが、現状の実行委員会予算では厳しいので、市負担金の増加だけでなく、民間からの協賛金を確保すること、③世界新三大夜景に認定された長崎の夜景と組み合わせたPRなどで、さらに集客数、宿泊率を伸ばすこと、という3点であった。

VI. おわりに

長崎開港後、渡来した中国人たちが唐四箇寺を建立し、華僑同士のネットワークを形成して以来、400年の時を過ぎても華僑社会は継続されてきた。戦後、日中両方における社会情勢などの変化により、華僑社会の団体、組織の構成、性質は言うまでもなく、華僑たちの伝統的な生活様式も大きな変容を余儀なくされ、次第に日本人社会に溶け込まざるを得なかった。そうした中で、彼らは「春節祭」を創出し、さらに長崎市と提携してランタンフェスティバルを立ち上げることにより、日本人社会との共生への道を模索し、歩んできたのである。

近年、日中両国の関係は冷え込みが続いている。国同士のやりとりに比べ、民間交流は注目されることは少ないが、草の根から一歩ずつ交流を深めることは、両国の友好関係にとって非常に大きな役割を担っていることは間違いない。その意味で、これから華僑と中華街が中心となって両国友好推進の役割を果たすことが、ますます重要となってくると言えよう。

参考文献

- (1) 歌川龍平(1949年)『長崎郷土物語』長崎民友新聞社。
- (2) 内田直作(1949年)『日本華僑社会の研究』同文館。
- (3) 王維(2001年)『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ—祭祀と芸能を中心に』風響社。
- (4) 章潔(2006年)「祭りとイベントの融合—長崎ランタンフェスティバル」長崎国際大学人間社会学研究科観光学専攻修士論文。
- (5) 斯波義信(1995年)『華僑』岩波書店。
- (6) 戴国輝(1991年)『もっと知りたい華僑』弘文堂。
- (7) 譚璐美／劉傑(2008年)『新華僑老華僑』文藝春秋。

¹ 在日華僑社会の始まりについて長崎開港(1517年)説、日本開国(1854年)説など諸見解があったが、ここでは長崎開港の説を妥当だと考える。

² 1623年に興福寺(三江村を中心に)、1628年に福濟寺(福建の泉州、漳州府)、1629年に崇福寺(福建の福州府)、また1678年に聖福寺(広東府)が建立された。

³ 鈕春杉は中国江蘇省蘇州の出身で、1844年以来、中国船脇船頭として十数度も長崎に來航した商人である。1859年以後、9年間唐人屋敷総代を務めた。

⁴ 元宵節は、旧暦1月15日を祝い中国での習慣である。正月は「元月」とも称され、「元月」の最初の宵であることより元宵節と命名された。

⁵ 「春節祭」は1987年から1993年まで計6回行われた。その中、1989年の「春節祭」は昭和天皇崩御のため、開催が中止された。